

# 有縁 無縁

今と昔で、意味が異なる言葉があります。例えば「あした」は、「次の日」のことを指しますが、古典では「朝（もしくは翌朝）」を「あした」と言っていました。

今回ご紹介の「有学・無学」は、世間での意味と、仏教で使う意味が逆転しています。世間では、学力のある人を有学の人と言い、無い人を無学の人と言います。

仏教で、「有学」というと、煩惱が残っていて、学ぶことが残っている段階を指します。「無学」というと、もはや学ぶべきことがない段階のことを指します。阿羅漢という修行者の最高位の人たちがこれに当ります。

意味がどうして逆転したのかはわかりません。しかし、仏教の使い方のほうが「学ぶ」とはどういうことなのかを顕している様な気がします。どこまでいっても、学ぶことが残っている「有学」である。物事を理解することを英語で「understand」と訳します。「under」は

「下」、「stand」は「立つ」。上から見るのではなく、下に立って見えるようになることが理解する。「学び」の本質ではないでしょうか。



百メートル／九妙合  
一歩／三十分  
どろろがすい  
「各味淳一五行歌」  
老任取

## こんなところに 仏教用語

身近な仏教用語を紹介しています。

# 浮世

「有学・無学」のところで、今と昔で意味が変わる言葉を紹介しましたが、意味や漢字が転々としていくものもあります。それが今回ご紹介の「浮世」です。

浮世絵・浮世話など。浮世が付く言葉はたくさんありますが、その場合は、「今の」「現代風の」という意味で用いられます。

元々、といいますがも紀元前三世紀の思想家荘子の言葉に「其の世に生くるや浮かぶが若し」とあるように、浮世は現世という意味で用いられるのが一般的でした。これが日本に入り、定めない世の中、はかない人生を指すようになりました。平安時代になると、世を嘆く心情と仏教の思想が結び付き「憂き世」と字を当てるようになります。そして、近世に入るとどうせだめならウキウキ楽しくいこうぜということで、再び「浮世」の字が当てられます。

このようにして、漢字や意味が転々としていったのが浮世です。こうして見ますと、人間の生き方が刹那刹那としていつて



いるような気がします。これから先、浮世はどのような意味に代わり、漢字が当てられるのでしょうか。それとも、使われていないのか・・・